

授産場について（繊維関連）

外国人向けの布製品と救助院の制服

当時の糸車(ド・ロ神父記念館蔵)

当時のドイツ製メリヤス編機(ド・ロ神父記念館蔵)

当時製造していた生地と足袋(ド・ロ神父記念館蔵)

ド・ロ神父が考案した救助院の制服(ド・ロ神父記念館蔵)

授産場の二階では、フランスから輸入された木綿織機を使い、女性が織物を生産していました。彼女達は、長崎に住んでいる外国人の需要に応じて、シーツ、タオル、ナプキン、ハンカチなどを生産していました。

また、彼女達は、救助院で働く人たちが着るために、日本風に改良を加えた西洋の作業着も生産していました。この作業着は、日本の伝統的な衣服に比べて、仕事をする際の利便性が高いものでした。

この時代、洋服は上流階級の人々が着るものとされていましたが、出津救助院の制服は、そのような社会的な地位を示すために作られたわけではなく、作業中により楽に体を動かせることなどの実用的な考慮からデザインされたものでした。